

素晴らしい須走を知りたい!

「すばらしい隊」養成講座 第8回講座概要

第1部：座学 須走の町を知る「須走口登山道と須走の御師」

■日時：令和元年11月16日（土）9時～12時

■場所：須走東災害対策センター

■講師：大高 康正氏 静岡県富士山世界遺産センター

学芸課准教授



■講義概要

1. 富士山の登山口と登山道

ー静岡県には江戸時代以前から富士山の登山道が3つあった。

ー①表口：富士宮市や富士市を通る大宮・村山口登山道(構成資産・構成要素での名称)。当時、富士宮市街を大宮と呼んだ。大きなお宮がある所は大体大宮という地名になっており、例えば埼玉県さいたま市の旧大宮市には武蔵国の一宮の氷川神社がある。富士宮市も富士山本宮浅間大社があり、ここは駿河国の一宮である。大宮を越えて北東に進むと村山、そこから山の中へ入るので、大宮・村山口と呼んでいる。表口とは東海道をを使う人にとっての表側のルートであるため表口と言う。

ー表口に対して北側の山梨県側は裏口となり、古文書でも表口に対して裏口と書かれているが、現在は北口と言っている。年間20万人以上の登山者のうち約6割以上が北口の富士吉田から登り、残りが静岡県から登る。江戸時代、関東の富士講道者(導者)が吉田口を登山道として使っていたので、今に至ると思う。

ー②須山口：裾野市の須山。サファリパークや富士山資料館があり、須山浅間神社が世界遺産の構成資産になっている。③須走口：表口は明治39年に新しい富士宮口登山道が作られ、須山口も御殿場口という登山道ができています。当時、富士身延鉄道や、東海道線で御殿場を通るルートができ、最寄り駅もできたので登山道も便利に上がれるように整備された。

ー須走口は、新しくあざみラインが整備されたが、同じ登山道が継承している。須走浅間神社が起点となり、8合目で吉田口の登山道と合流する。下山する時に間違えて須走口を下りる方がいる。須走口が本筋でそこに吉田口のルートが変更され、八合目にぶつけられた可能性がある。根拠として、須走口登山道上に久須志神社にある。神仏分離で明治時代以降は久須志と読み替え神社に変わったが、薬師堂といわれ、薬師如来がお祀りされていた。その薬師堂の管理やその周辺の山小屋の経営は須走である。吉田からあれだけの人が登っているにもかかわらず、山小屋やお堂の管理は昔から須走であるとなると、元々ここは須走が支配していた登山道であったと考えられる。

2. 須走口登山道

ー須走口登山道は須走地区からまっすぐ西方面に向かい山頂へと続き、八合目の大行合(おおゆきあい・おおいきあい)で吉田口の登山道と合流し、そこから一本道となる。須走口登山道は、1707年宝永の噴火で火山灰が降り積もり、古い古文書の多くが焼失した可能性がある。いつ頃開かれた登山道かは不明であるが、六合目から至徳元年(1384)の銘文のある懸仏(かけぼとけ)が出土したので、その頃には使われていた可能性がある。懸仏は金属製で、天蓋の下に大日如来が二体刻んである。裏側が鏡で御正体(みしょうたい)とも呼ばれ、神社のご本尊や前立に使ったりする。上に

丸く紐を通すところがあり、お堂の扉等に掛けたりした。明治44年9月1日付の静岡民友新聞に「富士山須走口六合目の室主 吉田兵造長男栄之進さん31歳が六合目石室の20間ばかり上の辺りで、電気工事の電柱を建てようとして地面を掘った時に一つの懸仏を発見した。唐銅にて铸造し…」とある。懸仏は場所を移動し祀られる可能性があるため、最初から六合目にあったかどうかは分からない。製作時期を刻んだ銘文があり、「相州糟矢庄大竹郷 富士浅間大菩薩 至徳元年甲子六月十九日 願主来賢」と書かれ、『富士の文学・美術・遺跡』という本でも紹介されている。相州糟矢庄は、今の神奈川県伊勢原市。大竹郷は伊勢原市の大字に「東大竹」など残っており、そのあたりからの奉納物であることが分かる。この『富士の文学・美術・遺跡』の記事では懸仏を、「今(1929年当時)は山三講社の講元の東京市麻布区の内田健次郎さんが保管している」とあるが、現在は小山町教育委員会の所蔵となっている。

- 山三講は富士講の講のひとつであるが、山三講の元講(講は枝分かれするので、発祥となる講という意味)が麻布十番にあった。この麻布の山三元講から奉納された講碑群が80基ほど、現在須走浅間神社境内の裏側に建てられている。麻布の山三元講は、地元に永坂の富士塚があり、これらの講碑群はそこに建てられていたものだが、東京の一等地で維持できずに富士塚を壊すことになった際に移されたのである。山三元講は富士山からの下山時に、須走御師の子孫が運営している大申学や米山館などに宿泊していたご縁で、須走浅間神社に講碑が奉納されたという経緯がある。永坂の富士塚の模型は、須走浅間神社2階の展示室で紹介されている。
- 至徳元年の懸仏は現在木箱に保管されているが、木箱の上にさらにもう一つ別の木箱があり、そこに「Fuji 浅間大菩薩 明治41年、フレデリック・スタール」というサインがある。スタールは、アメリカの人類学者で幅広いテーマで日本の研究を行い、アイヌ、松浦武四郎、なぞなぞ、絵解き、ひな祭り、山車、カップ、納札、富士講、看板、だるま、囲碁、将棋、寒参りなど調べている。自分の名前「壽多有」と刷られた千社札を日本各地へ持ち歩き、神社などに貼っていたので、「お札博士」と呼ばれ親しまれている。静岡県富士山世界遺産センターに寄贈いただいた小林謙光さんのコレクションに、スタールの富士登山の写真がある。旧吉原町(富士市)の錦光館という写真館がこの時期に山頂での撮影を請け負っており、台紙裏に大正9年夏にスタールと曾我部一紅、斉藤昌三とで須走口から登山した際のもので記されている。スタールは富士登山の際は須走地区の大米谷旅館を定宿にし、計5回登山を行っているが、富士山に対する思いがあり、富士山の見える場所で眠りたいという遺言を残し昭和8年に亡くなると、功績をたたえた記念碑と共に須走口登山道入口のフジヤマホテル(大米谷旅館の後身)の敷地内に葬られた。大米谷旅館は須走地区から昭和47年7月に登山道入口に移動し、フジヤマホテルとして営業した。その後営業権を富士急が引き継いだ。フジヤマホテルは昭和62年8月に廃業しており、スタールの記念碑も平成元年日本道路公団の道路工事により、東富士五湖道路の側道の現在地へと移っている。

3. 御師とは？

- 特定の神社やお寺に所属したり、間接的な関係を持っていたりして、寺社へ参拝者の案内を行ったり、宿泊などのお世話をする。街道沿いに集住して御師町を形成している場合が多い。須走地区は籠坂峠を越えて甲斐国に抜ける街道沿いの宿場であり、分かれて富士山頂上への登山道ルートがある。須走地区には、御師町が形成されていた。
- 御師＝御祈祷師、御師匠様の略語ではないかと言われている。富士山以外の御師は熊野や伊勢が有名で、熊野では「熊野御師(おし)」、伊勢では「伊勢御師(おんし)」と呼ぶ。伊勢には御師の家が

1 軒だけ市内に残っているが、御師として営業していない。御師は、明治時代初期に制度が廃止となっており、須走地区でも、代わりに旅館業を営んだりした家が多い。来年は御師制度が廃止されて150年となる。

—富士山登山口は、吉田口・須走口・須山口・表口があったが、表口には御師はいなかった。それ以外の登山道には御師がいる。表口では大宮口の浅間大社周辺では社人の家が御師の代わりに道者坊を営んでいたり、村山口では、修験道の山伏の家が道者坊を営んでいた。

—須走地区では、中世の終わり頃から御師と同じような活動をしていた家があったと思うが、宝永噴火で古文書がなく確認できない。寛延2年(1749)までの軒数は不明であるが、寛延2年に17軒に固定された以降は、幕末までこの人数である。

—須走の御師は、人別帳に「百姓兼帯の御師」とあり、百姓の身分に位置付けられていた。ただし、御師以外にも須走地区には江戸時代を通じて約70軒位は住んでいた。

—御師には檀那場という縄張りがあり、忙しくない冬(農閑期)に次の年の新しいお札を配りに、檀那場の中にある富士講を廻っていた。次年度の富士登山への勧誘という意味合いもある。

—御師は、村の中に自分の邸宅があり、そこで宿泊業を営んでいた。御師と道者(導者とも、富士山に参詣しに来る人)は師檀関係で結ばれており、道者は須走地区を訪れた際に、自らの居住する地域を檀那場としている御師の邸宅に泊まる。

—明治時代初期の「須走村図」を参考にすると、道の両向かいに家が並び町を形成していたことがわかる。☆マークが御師で、17軒あり「須走村御師職記録」でも活動内容が確認できる。

—新潟大学図書館所蔵「富士の道の記」によると、御師の接待内容、食事や富士山の行程が分かる。江戸の深川の礎山という人が富士登山をした時の記録で、7月12日富士吉田に到着し、御師外川家に一泊して出発した。礎山は講として登山したわけではなく、願掛けの御礼参りに行く道中で親しくなった栃木県佐野の五人組とともに、彼らが宿泊外川家に宿泊することにした。

- ①吉田に到着すると、家人が出した盥の水で草鞋の汚れを洗い屋敷に上がり、熱いお茶で一息。
- ②上段の次の間に通され、主人の外川能登守が口上(道中、山の天候、宿泊のお礼など)を聞く。
- ③広ブタ(大型の盆)にお神酒、吸い物、三ツものがだされ、主人が立ち去り宴会が始まる。
- ④宴会終了頃、手代が明日の予定を告げる。この時の登山は荷物は強力が持つので、明日依頼する強力代の代金や山役銭、馬の手配をここで頼んでおく。
- ⑤宴会の時の盆を下げると晩御飯が出る。その片付けは明日の強力が勤めており、挨拶があった。
- ⑥御師が御礼のお札等を持ってきて、望みのお札を頼み購入をする。
- ⑦手代が各自の勘定を出す。山役銭、どてら代、弁当代、草履4足代、強力代一人合計490文。品物をもらい2朱(875文)で支払い、残り395文が「坊入」、つまりは御師に支払われる宿泊料・食事・酒代となる。
- ⑧御師からのお礼があり、部屋に蚊帳を張り、寝蓐(ねござ)布団を敷き、就寝をする。
- ⑨翌朝出発時に一行、庭の前の滝で禊をする。富士吉田は入口から庭、その奥に宿泊する主屋があるので、庭の入口あたりに小さな滝が造作されており、そこで禊をする。須走地区の場合は、御師の宿坊に泊まる前に、滝不動のある滝で禊をしてから泊まると解説されている。
- ⑩離れ座敷の神前で神仏を拝し、家人が用意した熱い煎茶で一服し、各自お膳の朝食。
- ⑪礎山は浄衣(白装束)に着替えて登るが、佐野から来た人はそのままの衣服で登っている。礎山は雨具として笠一つしかもっていなかったため蓐を買っている。荷物(お弁当含む)は強力に任せる。
- ⑫途中山小屋で強力と合流して、昼食をとる。八合目で休憩するが、甲斐国から登山しているので八

合目からはいよいよ「駿河国」に入ると書いている。当時は八合目から上が駿河国にある富士宮市の富士山本宮浅間大社の境内となるので、八合目から上が駿河国だという認識だった。富士山頂に登ったあとは須走口から下りて来るが、須走口のことはあまり詳しく書いていない。

4. 須走村の宿泊業

- 寛政年間(1789～1801)には御師の他にも専門の宿屋は10軒あった。その他にお寺、一般の家々でもそれらがいっぱい場合は交代で宿泊させていた。須走浅間神社神主の小野家についても、自分の檀那場を持ち宿泊業を行っていた。須走村では御師だけが宿泊業を営んでいたのではなく、他の家々でも宿泊業を行っていたのである。檀那場(縄張り)から来る人以外の一見のお客さん、定宿なしの道者が非常に多かったという記録が、江戸時代に残っている。
- 御師以外にも宿泊業の家々が多くあるので、なるべく自分の所に宿泊してもらうため「導者宿引きからくり」という言葉が古文書に出てくる。東海道の吉原、十里木道沿いの勢子の辻、十里木、須山の十文字辻まで宿引きに出向き、宿泊料の割引競争を行った者がいた。これが村で問題となり、一見のお客様を均等に村全体で分けるようになる。
- 御師と宿屋等の違いとして、御師は檀那場を持ち、農閑期に檀那場に祈祷札を配りに行き、信仰をつないでいくため、他の百姓と違った神職としての権威を求めることになった。京都の吉田家から神道裁許状をもらい、自らを権威づけるようになる。須走御師が廻っていた檀那場は、相模国(神奈川県)、武蔵国(東京、神奈川の東埼玉県の南方)、伊豆国、千葉県の安房国、上総国、下総国に及んでいた。また大申学に残る道者帳から、檀那場以外からも多くの国から来ているのが分かる。
- 須走村の場合、御師が村役人も兼ねている。特に名主職(村のトップ)が御師により独占されている。吉田口の上吉田村は村役人と御師は兼帯していない。御師をしなくても村で生計が成り立つ場合は、村役人を御師がやっていないのであろう。しかし、須走村の場合、御師が村役人を兼ねているので、村にとって富士山の参詣者のお世話が、村を成り立たせるために重要だったと言える。宝永噴火の影響もあり、水に困り、農業が難しい村なので、道者相手に生計を成り立たせていたのである。慶応4年(1868)の段階の御師の苗字が確認できる。米山姓が6軒、高村姓が5軒、その他は小松、高相、梶、菅沼、小野、外川姓が1軒ずつ。
- 安政6年大申学家の家相図(間取り図で吉凶方位を占うもの)。右側(富士山側)が入口、本通りから入り、細長く奥に広がる様相は現在も変わっていない。須走も須山も当時の御師住宅の建造物はほぼ残っていないが、正面入口から主屋、奥座敷の離れという組み合わせになっている。大申学も正面に立派な薬医門、主屋と奥座敷が組み合わさった横長で奥深い構造である。主屋に入ると正面には式台玄関があり、玄関の下に御供所(ごくしょ)、その隣の隣に御神前、つまりは神棚の部屋があり、そのほか水場や風呂場、土間や台所があるのが確認できる。離れの入口には小部屋が並び、手前にトイレ、1階の主屋は14部屋、合計104畳、奥座敷は8部屋73畳、2階は4部屋29畳半あり、大申学は合計で23部屋の206畳半あった。たくさん登山者を受け入れられたことがわかる。式台玄関と薬医門は普段は基本的には使わないのではないかと推定している。宿場の本陣や脇本陣も正面玄関は大名以外普段は使わないからである。想定される一般の道者が入る際の経路は2種類。報告書で菊池邦彦先生は、家相図の上(南側)から入り、脇を廻って主屋と奥座敷をつなぐ辺りから、足を濯ぎ入るのではないかと想定している。たくさんの宿泊者が来る時には、主屋ではなく奥座敷に直接入ることもあったと思うが、私は式台玄関の脇にもう一つ入口がある(神入門)ので、その辺りから入ったのではないかと思う。これなら最初に御神前にお参りをしてから部屋に入ることができる。正

面の式台玄関は相当身分が高い人が来る場合にのみ使うのではないか。

ー小林コレクションにある大申学旅館が明治時代頃に発行した絵はがきは、①須走神社の神門②近代以降の大申学写真③神社本殿の3枚しか袋に入っていなかったが、絵葉書は8~10枚セットが基本なので、最初はもっと数多くあったのではないかと思う。その他は登山道を紹介している絵葉書が多い。

ー皇室で最初に富士山に登山した登山道は、須走口登山道である。昭和天皇が大正時代、皇太子であった際の登山している。須走浅間神社駐車場には、登岳記念の石碑がある。

ーこの登山記念として「皇太子殿下 富士御登山 御英姿」とする絵葉書もつくられている。頂上の銀明水と書いてある写真で、頂上から伝書鳩を飛ばして皇居に戻るか実験したそうだ。須走口の登山道の道が比較的真っすぐなのは、大正年間に馬で九合目まで行けるようにしたからである。また、皇太子の登山により、道を整備したことも影響しており、六、七、八合目には登山道の両脇に石積みみでして整備していた様子が現在も確認できる。

ー須走の本通り付近の写真（絵葉書）。米山館、反対側が大申学。鉄道が御殿場から籠坂に敷かれた時期で、レールが残っている。米山館の前にかかっている旗が「マネキ」で、富士講の講の名前を布で作って、自分の定宿にかけてもらった。

ー登山道の入口の写真（絵葉書）。皇太子の登岳記念碑が、昔は登山道の入口付近にあったことを確認できる。

ー一合目の馬返の写真。講の方の名前がたくさんかかっているのが分かる。

ー須山や表口のルートは絵葉書が出始める頃に新しい登山道になり、昔の様子がわかる写真はあまり残っていないが、須走口は近代以降も同じルートの登山道なので絵葉書がたくさん残っている。

第2部：体験「須走の御師の家 大申学の見学」

■講師：大高 康正氏 静岡県富士山世界遺産センター 学芸課准教授

■場所：本通り～大申学まで

■体験概要

その1

■昔の絵図の入口付近

ー右下の江島屋は現在神尾畳店。本居宣長が若い頃に泊まったと日記に残している。定宿のない人は割り振られて泊まったのだと思う。

ー荷物の十分の一の税金を納める十分一役所跡。現在のバス停名称は「車庫前」。馬車鉄道終了後運送組合の車庫跡だったのではないか。御殿場から来た人が乗降場所である。時期によっては、ここから上には車を通さず、通りを歩かせていたらしい。馬車鉄道は馬が引いている箱のようなもの。東海道線が開通して御殿場駅ができた時に、馬車鉄道がここまで来ていた。山中湖～中央線まで接続する構想があったらしい。

ー自動車で馬返しから神社の駐車場まで下りて、バスが出るのは「車庫前」なのでその間を歩いた。駐車場の辺りに旅館の番頭さんが下りてきた人を自分の旅館に案内したようだ。御殿場駅にも宿の案内人がおり、乗せたり



案内していた。昭和 30～40 年代までは宮上からの発着は賑わっていた。

一本通り両側には水路が流れていた。この絵はがきよりも古い幕末から明治初めのペアトの写真には真ん中に水路がある。真ん中と両側にもある時代があったようだ。必ずしも水路が家に上がる際、足を洗う場所だったかははっきりしない。生活水を流したりすることがあるかもしれない。真ん中に流れている所で、皿を洗ったりした可能性はある。不動尊があったところに昔は滝があった

その2

■大申学：建物入口

一地図上米山佐久間氏宅。入口は昔の面影が残っている。絵はがきを見ると、通りから直に入れる。建物は新しくはなっているが、通りから見て 2 階建ての建物、屋根が萱から瓦、今の形からも当時のイメージを膨らめて頂けると思う。後ろの米山館さんも近代的な建物になっているが、位置は変わっていない。コンクリートの建物の奥に奥座敷、長細い建物がある形は踏襲されている。



一主屋を入り奥座敷がある。70～80 年前とイメージは共通している部分はある。

一神棚は 2 階に一部屋あった。

一入口から見ると奥に沢山の部屋があるとは思えないが、実際は敷地が奥にとっても長く広がっている。

一照明は昔のもので、電球だけ変えて使っている。廊下の鏡は実行教の大先達が奉納した。

一富士講関係者が宿泊に来ることは現在はないが、小さい頃、20～30 人白装束の方が足を洗って上がった。今は、富士スピードウェイや自衛隊関係のビジネス客が中心。玄関、階段はそのまま、裏の門をくぐり、家庭のスペースで、2 階の一部屋全部神様のお部屋でその周りに客室があった。

一吉田の「まねき」は 1 個ずつ吊しているが、2 階建てになり 2 階から吊るすために長くなった。講の方がたくさん来る時代は、懸けやすいようにしていたかもしれない。

一富士講が講としてなくなっている地域が多く、活動せず名前だけ、先達の方だけという所が増えてきている。戦後、地域社会が変わり、コミュニティやつながりがなくなった影響で少なくなっている。

一江戸から明治の神仏分離の影響で少なくなったわけではなく、富士講は明治以降、神道化し発展した。新しく建て直された旅館からも江戸時代と比べて多くの部屋を整備する状況を見てもわかる。戦後、急激に社会の組織が変わり、講自体が少なくなった。





その3

■大申学：庭



一 大申学という名前は「大：大昔、申：申年に噴火した、学：宿屋」という意味。小申学は分かれである。昔の井戸は今も使っており、敷地は2,000坪で屋敷神を祀っている。

Q. 山梨から上る場合8合目で駿河国になった時は、また入山料を払うのか？

A. ないと思う。浅間大社にいくらか納めなければならなかったとあるが、入山料は須走村の収入になった。昔は噴火口には神様がいるのでお賽銭を投げていた。1シーズン何回か拾い集めるが、江戸時代は浅間大社と須走村で取り分について騒動になった。開山後数日～10日程浅間大社の手代が薬師堂に詰めており、その際の取り分だけは浅間大社6で須走村が4という配分で、手代が下山して以降は全て須走村の取り分である。

Q. 1文=3.2円。先ほどのはなしでは16,000円程度？

A. 一泊が6～7,000円位だったと思う。現在の民宿に泊まるくらい。山で強力等への支払いが15,000～20,000円位。あとは、それ以外に道中何泊かするのでその分は別途かかる。

Q. 宍野先生のお話では、講を作るのは東京からだとして100万円近くのお金がかかるので、代表者が行き、お金を出し合っていく。巨大スポンサーが必要だったとのことだが。

A. 富士講の奉納されているものには著名人、落語家や歌舞伎役者の名前が出てくこともある。自分たちの住んでいる所に講があり、スポンサーになると自分たちの興行にも有利だったりする。

Q. 須走口から富士山に行く時には、東海道は足柄峠を越えて来たのか？

A. 相模から足柄峠を越えて、古沢、須走へ来て上がっていく人も多い。東海道から富士宮口ではなくこちらへ廻る人もいる。十里木、須山を通り須走に。足柄峠を越えて下りて来ると今の足柄駅の辺り。そこから今も道がある程度追える。一部道路になっていて、その間が何も無い。突き抜けて、上小林や古沢を通って出てくる。山頂から須走通って、上小林 一幣司神社通って、足柄峠通って矢倉岳まではほぼ一直線。大雄山参拝されて大山行ったり、江ノ島行ったり…。足柄峠の上に講の碑があり、南足柄下りた所にも講の碑がいくつか残っている。